

平成30年6月9日(土)

大條家ゆかりの茶室の保存・活用について

佐藤憲一

1. 『仙台風俗志』に記載された大條家の茶室

① 『仙台風俗志』とは

昭和12年(1937)3月に刊行された仙台藩の民俗事例を考察した書物。著者は鈴木省三(雨香と号す)。『続仙台風俗志』は鈴木死後に刊行された続編。

② 著者・鈴木省三(雨香)について

鈴木省三は医者・郷土史家。ペリーが黒船で浦賀沖に来航した嘉永6年(1853)に岩沼本郷同心町に生まれる。鈴木家は代々古内家に仕えた医師の家柄。11歳で古内氏の小姓となり、14歳で仙台藩主伊達慶邦の侍医石田道隆に入門、医学を学ぶ。維新後、東京大学医学部薬学科を卒業し医師・薬剤師として活躍。晩年に郷土史研究者となり『仙台叢書』(22巻)の編纂に当たった。『仙台叢書』は郷土文献の保存・活用を目的に、郷土に残る多くの文献の中から、流布が少なく価値の高い史料を収集したもの。宮城県郷土史研究に欠くことのできない史料集。昭和14年(1939)没。87歳。墓は岩沼市法常寺。

2. 文化財の保存と活用について(パワーポイント)

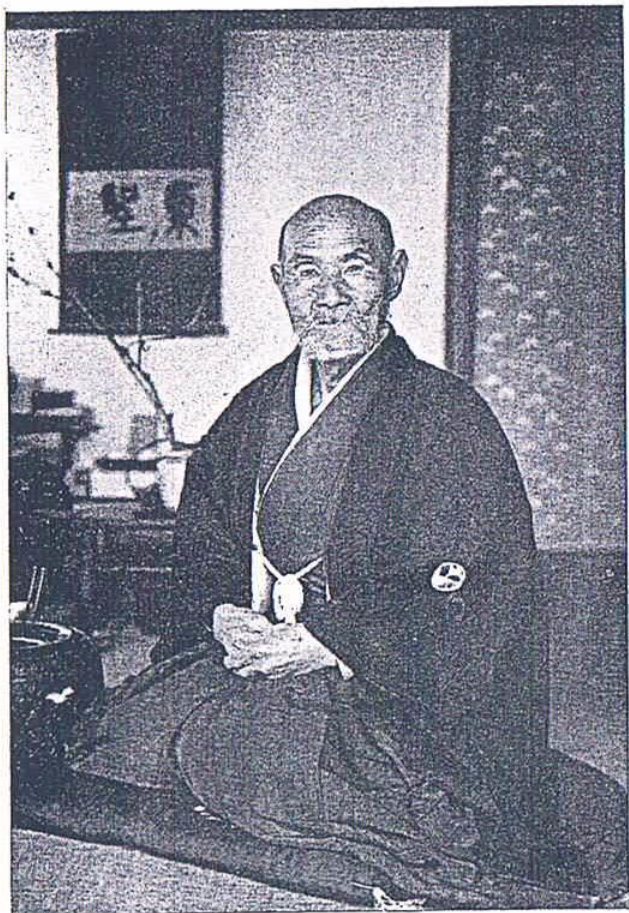
① 旧姉齒家茶室(残月亭) 仙台市指定文化財

仙台市青葉区川内の旧仙台北三の丸跡にある。建築年代は明治時代中期。松倉恂(初代仙台区長)が建て、その後姉齒家の所有になり二度移築されている。松倉の日記によると、残月亭と命名するにあたり伊達家当主の許可を受けたという。

扁額は、正徳4年(1714)に5代藩主吉村が政宗の筆跡による扁額を摸刻したものを、明治27年に更に摸刻したもの。一部に江戸時代にさかのぼる古材を使用。

② 旧有備館及び庭園 国指定史跡・名勝

大崎市岩出山字上川原町にある。「有備館」は仙台藩重臣、一門岩出山伊達家が開設した郷学(学問所)。開校は嘉永3年(1850)頃。「御改所(主屋)」と「附属屋」から成り、「御改所」は2代宗敏の隠居所として延宝5年(1677)に建てられたと推定される。庭園は4代村泰によって正徳5年(1715)に整備されたと伝えられる回遊式池泉庭園で、仙台藩の茶道頭清水道竿による作庭。平成23年東日本大震災で倒壊したが、同28年3月に復旧工事が完了した。



編者の近影

(昭和二十年二月・島松・法雲山荘にて)

(昭和十三年三月五日刊)

仙臺風俗志

鈴木省三著

茶事の部

編者は醫事の部のはじめにいへる如く十一歳より古内の侍童として居りし故折くは茶の會の席にも出入したれば其あらましを書き綴ることとするなり世には昔も今も茶の湯といふは誤にて正しくは茶ちの會ちといふべきものなりとそ

茶道家の事

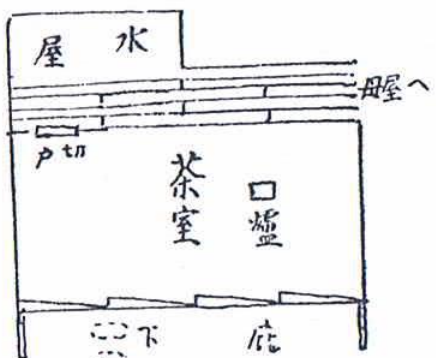
茶道家とは茶の湯師といへることにて仙臺藩にては之を御茶道おきといひ士分にて醫師と同じく法體にて藩主の左右に奉仕し平生は抹茶や煎茶を調へて之を供し茶の會のあるときは一切の事に與かるはいふまでもなきことなり此茶道師には色々の流派あり千家とは千の利休より出てたる一派にして尙二派に分れ表千家裏千家といふ小堀遠江守より出てたる一派を遠州流といひ片桐石見守より出てたる一派を石州流といふ仙臺藩にては石州流を本分として清水家二家及び安達氏などあり

又下田兩家及び前田氏などいふもありしが古内家にては此人くが何れも出入したれとも茶の會には清水兩家が頼まるゝが常なりしが如し維新少し前には清水道看といへる人あり紅裏服用御免となりし人なれば紅裏道看といはれたり藩の門閥家は勿論百石以上の人くは茶道を心得されは藩主より茶の會の相伴を命せられたる時不都合なれば何れも清水氏に頼みて其作法を習ふことくなり居れり清水道看の家には祖先道関が其師古田織部正より授與せられたる武野紹鷗遺愛の猿曳棚あり其猿曳の圖は古法眼元信の筆にて有名の名器なりしが其家零落して之を賣り出し轉々して帝室博物館の所藏となりたり

茶室の事

茶室は門閥以下歴々の家には何れも之を造り置きしも廢藩後は皆取り拂らはれたる中には小座敷として用ひ來りし家もありたれともこれとても今はあるべしとは思はれず吾が先輩たる中目物外翁は茶事にも秀てたる人なりしが明治十四五年の頃まで珍らしくも昔の儘にてありし柴田氏の屋敷跡今は蹟軍踏行社に取り残れる茶室を買ひ取り土樋なる下屋敷に移し建てありしは實に魯靈光の思ありしも今は如何なりしに

や これは茶室としては完全なる建築なるかの如く思はるれば其平面圖を示すこと
左の如し

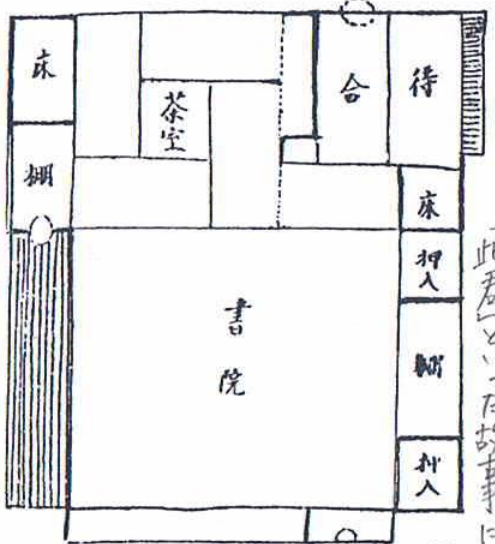


又此室の庭に在る石燈籠は右圖の如きものにして珍らしく見えたれば序なからこ
ゝに圖して示し置くこと然り

◎ 又現存の茶室として特に記すへきは仙臺市支倉通北二番丁西南角なる伊達氏大條氏のこと

の邸内にある茶室にして是は藩主より
拜領したるものにして初めは川内柳丁
の自邸に在りしを支倉通へ移したるも
のなるが其茶室の名を此君亭といへり
其間取は下圖の如し

最後に記するは右茶室にあらずして
新茶室の事なるが維新後は何事も廢れ
たりしことゝて茶事も亦棄て顧みられ
ざるに至りしも明治十四五年の頃より
そろく之を嗜む者出てたりしが陸軍
側にては軍醫連中が學びはじめたるが
其指導者は看護長たる安達雲齋なれば心の儘に學ひ得たるなり それより追々世の
人々は之を學ぶやうにはなりたれとも未だ茶室を新築する迄の熱心はあらざりしに
大正の終はる頃北七番丁新坂通と土橋通の間なる中程北側に茶室を新築せし人あり
細谷某氏なる由 その茶室は見えされとも門構は一見して茶室の入口なることを想



此君亭

此君とは「竹」の別名。東
晋の王徽之が竹を指して
「此君」といつた故事に其をづく

(晋書曰、
王徽之)

像なさしむることなるが斯道の篤志人といふ可し

仙臺茶人の現況

維新後一旦廢れたる茶道は稍再興したる有様なりしもそれは一時の風尚に過ぎざりしか如し 左あれとも仙臺固有の石州流の本元なる清水道鑑や同家出身の四竈友三や岩淵廉安達雲齋などの諸氏が生存中は其流派の流を汲む人もありしが是等の人は死亡したる今日となりては石州流茶人も有りや無しやの有様となりしなり 然るにこゝに篤志の人あり 細横丁待合茶屋の女將阿部の挿花の師匠なる野の庵利府村澤乙心月寺住持が深く仙臺に石州流茶道の廢れたるを嘆き是を世に残したきものなりと女將に相談したるに女將は何人より聞きたるにや余を石州流茶道に通し居る者として人を以て申し越されたれとも余は只四竈氏に出入したる迄にて敢て學ひたるにもあらざれば佐藤瀏といへる人は余が友人にて四竈氏に就て石州流を學ひたる人なれば此人が然る可しといへば余に紹介を頼みたしとのこと故之を紹介したるに佐藤氏其人も心よく承諾ありて壽亭にて野の庵はじめ四五人これを學ひつゝあれば石州流の命脈もごふやら一縷の望をつなぎたる形となれるは目出度といふべし 千家の茶人としては山家山家

氏豊三野村氏徳中目氏齊等ありしも疾に此世を去られ今は伊藤氏菊露あり 時々京都なる同派の宗匠千宗室といへる人を招き講習をなしつゝあるは殊勝の事なりといふ可し 其他遠州流茶道師の看板を掲げある人も見ゆることなれとも其内容を知るよしなきを遺憾とするのみ

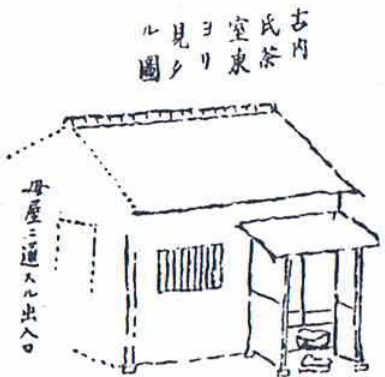
茶道記憶の一

余が主人たる岩沼邑主古内廣居通稱左近介は松柴庵と號し石州流の茶道に通せられしが平生用る茶は宇治の茶師なる上林牛加といへる者より其年の新茶を葉の儘にて一尺に五寸はかりの箱に入れて紙を張り付けその紙一面に濃き柿澁を塗りたるを買ひ取りしを十月頃爐開きして茶の會を催すとき其茶箱を切り開き其日に用る丈の葉を取り出し茶臼にて挽きて用るなり 之を口切りといふ 此茶を挽くには十三四位の兒童に挽かすがよろしいとのことにて余は毎度之を挽きたるが決して急かぬやうしづ／＼と挽くべしと果子などを興へられゆる／＼として挽くことなりし 爐開きとは其年四月より爐に蓋をして之を閉ち其代り



に風爐を用ることなるがかくして夏より秋にかけて之を用ひ十月に至れば風爐を取
 拂ひ爐蓋を取り除けるなり 之を爐開といふ 余が舊主古内家にては此爐開の時に
 茶の會を催さるゝが例なりしがこれは來客に口切の新茶の風味を賞翫なさしむるは
 本分なることなから外に來客を喜はするものあり それは岩沼西なる三色吉よしいろと
 いへる所冬至梅こててうど此爐開頃に咲く梅の花を挿て床に飭り來客をアツといふ
 程うれしからすることなりし 又今一つの馳走は會席料理の内椀物として魚饅頭と
 いへるものを用ること是なり 其料理法は普通の蒲鉾を作るやうに平日又は鱈の肉
 を摺りつぶし、ごろくといふ程に水と酒と少く鹽を加へ味を調和したるものを金杓子
 にすくひ取り其肉泥の中へ下戸そろひの客ならば赤小豆餡を落しそれを包むやうに
 肉泥を盛り杓子の儘肉泥の崩れぬやう熱湯中に沈め肉泥のかたまりたる頃杓子より
 竹へぎなどのやうなるにてはがし湯の中にはなし浮き上るを度として掬ひ上げ葛餡
 をかけ椀に盛りて指し出すなり 之を今日の出來合物にて代用するならば半片はんぺんを
 蒲鉾屋より買ひ取り横合を裂き之に餡を入れて用れは宜しからんと思はるゝことな
 り 茶事として記載すべきは獨り抹茶を用る茶の會に止む可らず 煎茶の法も記載
 すへきなりといへとも余が十四五歳の頃維新前には煎茶の法は行はれさりし故記載すへ

きやうもなきことなから仙臺藩醫員に竹中玄脩といへる人ありしが此人は頗る人格
 者にして歌道にも達し又煎茶にも達し何も道具の吟味をなさずして有り合はせの物
 を用ひたりといふ たとへは茶託などは貝敷今は廢れて見るへきやうもなしそれは直徑三寸ばかりの
 搜物にて小皿の如く中央を赤く其外は黒く塗りたるものを用ひなとしたりよしにて誠に慕はしきことなれとも今日にしては之を見ることも得
 さるを遺憾とするのみ



貝敷の圖

